



る う て る

2014年
9月
No.808

■発行所
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■振替口座 ■ 00190-7-71734
■ウェブサイト ■ <http://www.jelc.or.jp>
■E-mail ■ jelc@jelc.or.jp
■発行人 ■ 安井宜生 koho06@jelc.or.jp
■印刷人 ■ 精文堂印刷株式会社
■定価 ■ 1部 40円 (郵税を含む)

説教「人生に必要な荷物」

藤が丘教会牧師 佐藤和宏

自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。(マタイによる福音書10章38節)

引越をしました。

荷造りをしていくと、見慣れないものや不明の箱、懐かしい品々が出て来て、しばし作業する手が止まる。ことがあります。それらは前回、引越してしてから一切手をつけていない荷物でした。私たちは余剰な荷物をたくさん抱えて生きていく現実を、引越をするたびに思い知らされます。しかし、余剰な荷物をすぐに処分出来るかというところでは、そうではなく、また使うときがあるかもしれないと次に持ち越してしまふ私があります。今回の引越して見いだした余剰な荷物も、そのまま引越しの荷物となり、開けられないまま物置に入ることになってしまいました。

私たちは人生を生きるにあたって、荷物を抱えていると言えましょう。生きるためにあれもこれも必要であると思えるため、日に日に私たちの人生の荷物は膨れ上がっています。それでも、余剰な荷物を手放すことができません。まして、だれかと分かち合うこともできない私たちがいます。

不必要な荷物はそこに残して、人生を新たに歩み始めるならば、その足取りはこれまでより軽くなり、その後の人生は生きやすくなるはずですが、本当はそうなるはずではないのです。本日はそのことがわかっていくのですが、人は重さを増して行くばかりの荷物に押しつぶされそうになりながらも必死になり、その足取

りは重くなるのです。

「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」と言われています。主イエスは人生に必要な荷物としてあれこれ抱え込んでしまふ私たちに、必要な荷物はただ「自分の十字架である」と明らかにしているのです。

「自分の十字架について考えるとき、私は自らの罪だけを思い描いていました。しかし、「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きていくのだと考えるとき」(ローマ書6章11節)というパウロの言葉は「キリストに結ばれて、キリストの十字架に結ばれて、キリストと共に死に、キリストと共に生きる」ことを教えています。つまり「自分の十字架とは、まずキリストが担ってくださったものなのです。そしてその十字架を自分のものとして担って行く。私たちはこうしてキリストに結ばれて生きるのです。」



ある日の聖書日課で、次のメッセージが目にとまりました。

「どんな時にも人生には意味がある。誰かがわたしを待っている。何かがわたしを待っている。その誰かのために、その何かのために、わたしには出来ることがある。」

主イエスが言われた「自分の十字架を背負う」を考えるとき、このフランクルの言葉をわたしは思い起こします。自分の十字架とは、決して重荷のことではありません。主ご自身がその人のために備えてくださったものが自分の十字架です。それはわたしを必要としている誰かのために、またわたしを必要とする何かのために、主がこのわたしを用いてくださるためのものです(部刃)。(高橋誠・ディコンリ福音教団豊浜教会牧師)

「自分の十字架とは、自分のためのものでも、自分のために課せられたものでもなく、「主ご自身がその人のために備えてくださったもの」

であると言われています。私たちのために主は十字架の死を遂げてくださいました。これによって私たちは、もはや自分の人生のために多くの荷物を抱え込む生き方から解放されたのです。そして今や主は、この私を通して一人でも多くの人々に、神の恵みを与えようと望まれているのです。これが私たちが担う「自分の十字架」です。そしてそれは苦しみではなく、「自分が生きていくことに深い喜びを感じる、真の生きがいのある歩みである」と言われているのです。「自分の十字架」とはこの小さく弱い私が主に必要とされていることです。そのためキリストはまず十字架を負われたのです。このキリストに結ばれて私たちは、自分の十字架を担って歩み始めることができるのです。

キリストの十字架に結ばれた「自分の十字架が私たちに備えられているのです。キリストの十字架に結ばれて、このキリストの十字架に結ばれた「自分の十字架は、私たちがだれかのために少しづつ担って行く、あらゆる人々に等しく与えられる神の恵みです。そしてこれこそ、私たちの人生に必要な荷物であり、その他の何ものでもないのです。」

聖書日課セミナー
ひたすら聖書の学びに没頭する3日間

2014年10月20日~22日
ホテルウェルシーズン浜名湖

講師 江藤直純牧師
主催 ルーテル「聖書日課」を読む会

詳細は、以下のサイトへ
<http://goo.gl/qDmCqR> (短縮URL)

教会手帳 2015

10月1日発売予定

定価 1,100円

宗改五〇〇周年に向けて
ルター研究の意義を改めて考える(29)
ルター研究所所長 鈴木 浩

当時、人々が競って罪の償いを免除する。贖罪を買っていたことに見られるように、中世後期の人々にとっては、「罪の赦し」以上に「罪の償い」の方が事実上、大きな意味を持っていた。石を投じて窓ガラスを割ってしまった。その行為は赦されても、窓ガラスを元の状態に戻す責任は窓ガラスを壊した人にある。壊れた窓ガラスの補修。それが償いの行為に相当する。それが済まない限り、事は決着しないのだ。

この償いの行為がなかなか大変で、大部分の人は、現世でそれを果たすことができない。その場合は、死後煉獄で償いの行為を続けねばならないことになる。ダンテの名作「神曲」の煉獄篇は、この煉獄の世界を描いたものだ。地獄、煉獄、天国。この三つが死後の人々を待つ世界であった。

煉獄で償いの行為を続けている先祖の霊は、あなたがこの贖罪を買えば、瞬間に天国に昇るのだと、販売人は宣伝していた。人々の心理を巧みに誘った宣伝だった。ルターは、痛切な皮肉でそれに反論する。「金が箱の中へ投げ入れられて、チャリンと鳴るや否や、魂が煉獄から飛び立つという人たちは、人間的な教養を身に伝える(第七巻)。

訂改の文式礼拝



式文改訂の理由について

白井真樹
日本ルーテル教団式文委員

30年以上の歳月が経過しているということ自体が大きな理由です。先ほど、私たちの教団では現行の式文がようやく定着したと述べてきた。発表から定着まで実に30年を必要としたのです。今、改訂しておかなければ、この先、現行の式文をさらに30年も40年も、見直さず用い続けることとなります。

もちろん良いものが長く用いられることは素晴らしいことです。同時に、この30年の間に、様々な変化がありました。まずは日本語です。かつて使われていた言葉が、現代の人たちには通じなかつたり、違った意味を持つようになったりしています。

私たちが用いている日本語聖書も、『明治元訳』(1887年)、『大正改訳』(1917年)、『口語訳』(1955年)、『新共同訳』(1987年)と改訂が重ねられ、さらに、2016年に『標準訳』が発行される予定です。30年が改訂の一つのサイクルとなつていきます。

さて、現行式文の発表からおおよそ30年経った現在、ルーテル教会は、式文の改訂作業に取り組んでいます。今なぜ式文を改訂する必要があるのでしょうか。

まず、前回の改訂から

た、古きよき伝統的なものとともに、新しいよいものがたくさん生み出されています。

現行式文に対する課題もいくつか指摘されています。そうした中で、今ここで、私たちが改訂作業をしておかなければ、そのような様々な変化や課題を踏まえないうまま、毎週の礼拝を続けていくことになりかねません。

また、キリストの教会は、「今」の私たちのために存在しているのとともに、「未来」の次の世代の人たちのために存在しているものでもあります。私たちが慣れ親しんでいるものが変わることに、寂しさを感じたり、新しいものをなかなか受け入れることができなかつたりすることが、よくわかります。だからこそ、30年前も、現行の式文に、必ずしも肯定的とは言えない受け止めもなされ、定着するまでに長い歳月を要したのでしょう。

けれども、私たちが宣教的な視点に立つとき、絶えず「今」と「未来」を同時に見つめなければなりません。「今」のものを大切にしつつ、「未来」のために見つめ直し、新たなものを生み出すこと

の大切さを思いいます。宣教100年を機に、次世代の若者たちへの信仰の継承と宣教を目標に掲げ、取り組んでおられる日本福音ルーテル教会から、式文改訂の呼びかけがなされたことに敬意を表します。これは、500年を迎える宗教改革の精神に実にあふさわしいことであるとも言えるでしょう。

キリスト教手話と出会う

原田蘭留(小石川教会)

地域で手話を学び始めた頃、本屋で小嶋三義先生の「やさしい手話」キリスト教手話入門(キリスト教視聴覚センター)に出会い、

「やさしい手話」キリスト教手話入門(キリスト教視聴覚センター)に出会い、力にグングン引き込まれていきました。手話で「福音は「神」土愛「土」教え。「信仰」は「主」土受け入れる」と表すのです。いつも見聞きする聖句も、手話にするとき生き生きと心に迫ってくるのを感じました。

る者がおられること、手話通訳があることに惹かれ、私は小石川教会に導かれ、それまでの所属教会から転会をしました。そして教会手話研修の場で、小嶋先生ご本人との出会いも与えられました。

小嶋先生には教会手話通訳をイロハから教えていただきました。教会手話通訳は説教を聞き、心で感じて自分の内に絵を描き、それを手で表すのです。よろこぶ者はあなたの手話の中に絵を見ています。「手話通訳者は、牧師と同じツールをかけているのです。手話をしている時、イエ

スさまと繋がっているのですよ。」との教えは、私の教会手話通訳の原点になっています。通訳は、大変でないと言えはウソになりますが、事前に送られてくる徳野昌博牧師の説教を何十回も読むものですから、いつも祝されている自分に気づかされていく自分気づかされていきます。通訳の時、自分では分からない手話表現は礼拝前にるる者の方に教えていただいたりします。傾きながら温かく見守ってくれるる者の方。手話が見やすいように照明に心を配ってくださる方。「通訳は苦勞様。ありがとう。」と笑顔の方です。



きたての原稿と共に「質問でも何でも聞いて！いつでも力になりませう」とひょうきんにサポートしてくださる徳野牧師。励まし合える通訳仲間など、多くの方々を支えられながら、手話通訳者として立たせていただいています。

今回、小嶋先生の最新刊「キリスト教視聴覚センター」の発行により、新しく手話通訳者が起こされることを祈っています。

第2回全国青年ハイブルキャンプ報告

竹田大地(ENG-YOUTH)

7月11日から13日、2泊3日の日程で、日本ルーテル神学校を会場として第2回全国青年ハイブルキャンプが行われた。青年10名、スタッフ4名の計14名で聖書と向き合い、メッセージを作成した。

このプログラムの目的は信徒育成である。参加者の中にはすでに教会学校などで奉仕をしている者もいるが、将来的に

教会学校、幼稚園、保育園、諸施設としてハイブルでの伝道の業を担う青年たちが、メッセージを語るために、そのヒントとなる聖書の読み方を学んだ。

高村敏浩牧師を講師として、『だれにでもできる楽しい聖書研究法』聖書研究の手引き(森優牧師著)から「深層法」と「経験法」を学び、それを手がかりにして、み言葉から、イエス・キリストが私に何をしてくださったのかということを感じ、味わい、それを受けて参加者それぞれが5分程度

のメッセージを作成した。このキャンプは、参加して終わりではない。むしろ始まりである。キャンプからそれぞれの生活の場に戻り、その歩みの中で聖書により一層親しみ、神が私にしてくださったこと(徳野をいつでも、どこでも問いながら信仰生活を送ってほしいという願いを込めていふ。そして受け取った福音を証しする者として歩むことへと導かれるのだということ。

最終日、三鷹教会での主日礼拝の説教を聞く参加者にとつて重要なこのプログラムをこれから

も継続していきたいと考えている。この働きを覚えて、福音の宣教とルーテル教会を担う人材が育まれる豊かなキャンプとなるよう祈り支え、また参加者を送り出したい。



「日本福音ルーテル教会における社会問題への関わり方について」

事務局長 白川 蓮生

前回は「信仰者として一人ひとりが、それぞれに暮らしている社会の中で、まず祈り、そして行動し、発言する。」これがJELCの基本理解であるという考えについて説明しました。これを踏まえた上で、続いて二つの事柄を考

えをもつてゆこうとするのかとの疑問です。個人の判断に任せられて

は答えが出にくい難問となつていのが通例だからです。

※直近では2014年8月に「真の平和を表現するために」

や緊急性が高じてきて、看過しえない状況に進むなら

る事案や行為に対して問題性の指摘など、直接的な

表現である理解されません。

！マルティン・ルーターによる宗教改革と500年の歴史の経過がイメージできること

「教会の改訂がありまして。社会委員会の任務で、」

「教会の内に向けて」JELCに連なる人々が、考え

の表題で、社会委員会見解ができました。

2008年の答申にも、「正義と平和、人間の尊厳

これは、単に声を合言葉として発言すれば、当然、個人

は、単に声を出せば、教会を分裂させることに用

！単色加工した、縮小拡大加工にも対応できること

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えるべき」と規定

第2回 東教区宣教フォーラム報告 「宗教改革を語る 信徒になろう！」

準備委員会副委員長 金子直美 浦田教会

7月5日に東教区宣教フォーラムが浦田教会で行われた。今年で21回目を迎えるこの企画は「信徒の、信徒による、信徒のためのフォーラム」として

が2年毎にもちまわつて続けてきたものだそう

「第一回目は宗教改革を行つたルターという人物をもう一度学びなおそう

午後には「ワールドカフェ」という手法で、各々

感じたことは信徒が信仰の姿からは、ひしひしと

感じるものがあつた。164名の参加者に感謝したい。

募集要項(詳細は必ず公式HPで確認ください)

募集要項(詳細は必ず公式HPで確認ください)



宗教改革500年記念事業 シンボルマーク募集

マルティン・ルーターによる宗教改革運動は1517年10月31日に始まり、2017年には「宗教改革500年」を迎えます。

日本福音ルーテル教会でも、様々な記念企画がなされてお

の注目を集め、親しんでいた

シンボルマークを募集します。

募集要項(詳細は必ず公式HPで確認ください)

